

今からおよそ540年ほど前、稲荷町あたりにあったと言われるとうか山で、伝治左衛門がたき火をしているうちに、そばの石に火がついて、石炭を発見したという伝説があります。

そして、石炭をたくさんほるようになったのは今からおよそ300年前の江戸時代になってからです。

その後、明治時代になってから三池炭鉱は、国のものとなり、外国の技術も取り入れられて近代化が進められました。1891（明治24）年には、石炭を運ぶためにじょう気機関車が使われはじめました。

こうして、大牟田市は、石炭をほる仕事がかんになりました。



およそ100年前の宮原坑

石炭のれきし	
540年前	伝治左衛門が石炭を発見
290年前	平野山で石炭をほり始める
1873年	三池炭鉱が国のものになる
1889年	三池炭鉱が三井のものになる
1889年	團たくまが事務長になる
1898年	宮原坑で石炭をほり始める
1902年	万田坑で石炭をほり始める
1905年	三池炭鉱専用鉄道本線開通
1908年	三池港開港
1940年	三川坑で石炭をほり始める
1945年	空襲で大牟田の家が焼ける
1951年	人工島（初島）ができた
1963年	三川坑で大きな爆発事故があった
1997年	三池炭鉱が閉山した

そして、よその村や町から働きに来る人がだんだんとふえて人口も多くなり、大きく発てんしました。

はたらいていた人の中には、遠くよろん島や朝せんから来た人達もいました。

ほった石炭を各地へ運ぶためには、大きな船が便利でした。しかし有明海は干満の差が大きいため、当時の大牟田港には、大きな船が入れませんでした。そこで團たくまは、5年ほどかけて三池港をつくりました。

この港ができたおかげで、大きな船が出入りするようになりたくさんの石炭を運べるようになりました。



明治・大正時代は、いろいろな仕事を人の力でおこなっていました。

石炭をほる様子を調べよう。



しくり 木をつかって、こう道（トンネル）を補強します。



さいたん 男の人（さきやま）が石たんをほり、女の人（あとやま）が運びます。



せんたん ベルトコンベアの上の石たんとぼたをえりわけます。

石炭をたくさんほるようになるにつれて、入り口から何百メートルも下までエレベーターでおりて行ったり、長い時間、人車に乗って仕事場まで行ったりするようになりました。

今から100年ほど前の炭鉱では、12000人ほどの人が働いていました。

そのうち、その年にやとった人が8629人で、同じ年にやめた人が8725人もいたそうです。

